慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 『ヴォルムスの薔薇園』の裏切り者ヴィテゲ：ディートリヒ歴史叙事詩との関連から |
| Sub Title | Witege im "Rosengarten zu Worms" |
| Author | 渡邊, 徳明(Watanabe, Noriaki) |
| Publisher | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会 |
| Publication year | 2008 |
| Jtitle | 慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.44 (2008. ) ,p.79- 106 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20080930-0079 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『ヴォルムスの薔薇園』の裏切り者ヴィテゲ

## ――ディートリヒ歴史叙事詩との関連から――

渡　邊　徳　明

### 序　『ニーベルンゲンの歌』のヴィテゲ

den het erslagen Witege,　dâ von sô het si jâmer nôt.
その子を斬り殺したるはヴィテゲ　それが母の心を苦しめ苛みぬ
<『ニーベルンゲンの歌』1699,4>

13世紀初頭に成立したとされる『ニーベルンゲンの歌』(Das Nibelungrnlied)[1] の後半に一箇所登場するヴィテゲ（Witege）の名は，この叙事詩の理解に大きく関るものではない。しかし，このヴィテゲなる人物の存在がもしも無ければ，『ニーベルンゲンの歌』に登場する王妃ク

1）本稿にて引用・参照する中高ドイツ語テクストは，以下を使用。本文では，各テクストとも以下のように和訳したタイトルにて表記する。『ニーベルンゲンの歌』：Das Nibelungenlied，hrsg. v. K. Bartsch und H. de Boor, 22. Aufl. v. R. Wisniewski，Mannheim 1988.,『ディエトリーヒの流浪』：Dietrichs Flucht, Textgeschichtliche Ausgabe, hrsg. von Elisabeth Lienert und Gertrud Beck, Tübingen 2003.『ラヴェンナの戦い』：Rabenschlacht, Textgeschichtliche Ausgabe, hrsg. von Elisabeth Lienert und Dorit Wolter, Tübingen 2005.『アルプハルトの死』：Alpharts Tod, hrsg. von Ernst Martin In: Deutsches Heldenbuch II, 1866（Neudr. Dublin / Zurich 1967）, S. 1-69. 『ラウリーン』A：Laurin und der kleine Rosengarten, hrsg. von Georg Holz, Halle a. S. 1897.『ヴォルムスの薔薇園』：Die Gedichte vom Rosengarten zu Worms, hrsg. von Georg Holz，Halle a. S. 1893.

リエムヒルト（Kriemhild）や英雄ハゲネ（Hagen）の運命は，少し違うものになっていなければならないとも言える。

クリエムヒルトは手足を縛られた仇敵ハゲネに対し，自ら刀を振るって命を奪う。しかし，その場面を目撃した一人の英雄によって，クリエムヒルトは一刀両断に斬り殺される。

ハゲネを戦いの末に縛り上げたのは英雄ディートリヒ・フォン・ベルン（Dietrich von Bern，Bern は中高ドイツ語の Berne。今日の Verona）であり，クリエムヒルトを斬り殺したのはその軍師である英雄ヒルデブラント（Hildebrand）である。

ディートリヒ，ヒルデブラント主従がこの惨劇の起きたエッツェル（Etzel）王の宮廷に滞在していた理由の元をたどればヴィテゲの存在に行き当たるのである[2)]。ヴィテゲは『ニーベルンゲンの歌』の後半部の世界の暗さの元凶とも位置づけられる人物なのである。この『ニーベルンゲンの歌』では，エッツェル王，ディートリヒのみならず，二人の親友であるリューディゲール（Rüdiger）もヴィテゲによって不幸に陥れられたことになっている。本論冒頭で，ヴィテゲに殺された息子を母親が嘆く箇所を引用したが，この殺された息子はリューディゲールの子息ヌオドゥング（Nuodung）であり，嘆く母はリューディゲールの妻ゴテリント（Gotelind）である（もっとも，このヌオドゥングがどの戦場でヴィテゲに殺されたのかは明らかにされていない）。

このヴィテゲという人物は，その後 13 世紀半ばから後半にかけて，『ニ

2）ディートリヒ冒険叙事詩の内容・諸情報に関しては，主に以下の文献も参照した。Vgl. Werner Hoffmann, Mittelhochdeutsche Heldendichtung, Berlin 1974, S. 161ff., Roswitha Wisniewski, Mittelalterliche Dietrichdichtung, Stuttgart 1986, S. 134ff., Joachim Heinzle, ‘Dietrichs Flucht’ und ‘Rabenschlacht’ :In Die deutsche Literatur des Mittelalters Verfasserlexikon Bd. 2, Berlin 1980, Sp. 115ff., Ders. Einführung in die mittelhochdeutsche Dietrichepik, Berlin 1999, S. 58ff.

ーベルンゲンの歌』の影響で生み出された，ディートリヒ叙事詩群にも多く登場する。その一つ『ヴォルムスの薔薇園』（Der Rosengarten zu Worms, 略称 Rg.）のメインヴァージョン A（略称 Rg.A）と D（略称 Rg.D）におけるヴィテゲの描写を本論では扱う。とりわけ，同時代の他のテクストからの多様な影響が認められて興味深い D ヴァージョンのヴィテゲ描写に注目し，この D ヴァージョンを取り巻いた文芸テクスト受容の状況について考察したい。

## 『ヴォルムスの薔薇園』A におけるヴィテゲ像

1250 年ごろに成立した英雄叙事詩『ヴォルムスの薔薇園』A は，『ニーベルンゲンの歌』のパロディーの一つとして知られる[3)]。この作品ではヴェローナ（Verona, 中高ドイツ語では Berne と書かれることが多い）を本拠とする英雄ディートリヒ・フォン・ベルンを主将とするアメルング族の 12 人の英雄たちが，ブルグント族の王女クリエムヒルトの挑戦状に呼応し，彼女のいるライン河畔のヴォルムスへと遠征し，その地を守るブルグント族の 12 人の英雄たちと，薔薇園において決闘を行い勝利する。主人公のディートリヒ・フォン・ベルンは『ニーベルンゲンの歌』の後半部で活躍する英雄である。この人物については，中世のドイツを中心にいわゆるディートリヒ伝説が知られていた。

この『ヴォルムスの薔薇園』A はディートリヒ冒険叙事詩（Aventiurehafte Dietrichepik）と呼ばれるジャンルに分類される。このジャンルに属する作品として他に，『ヴィルギナール』（Virginal），『エッケの歌』（Das Eckenlied），『ズィゲノート』（Sigenot），『ラウリーン』（Laurin），などがあるのだが，これらの作品においては，やはり主人公

3）『ニーベルンゲンの歌』と『ヴォルムスの薔薇園』A の関係については以下の拙論を参照いただきたい。渡邊徳明：「13 世紀における『ニーベルンゲンの歌』の受容」，日本独文学会編『ドイツ文学』（107），115 ～ 125 頁，2001 年。

であるディートリヒが冒険の旅に出て，巨人や小人と決闘を行い活躍する[4)]。ディートリヒが馬に乗って旅をし，敵と決闘して倒す，という筋立てを持つこれらの叙事詩は，1170 年ごろにハルトマン・フォン・アウエ（Hartman von Aue）によって書かれた『エーレク』（Erec）をその最初とする，アルトゥース・ロマーンの文学伝統の延長線上にあると言っても間違いではない。したがって，ディートリヒ冒険叙事詩のジャンルのテクストは素材をドイツ固有の伝承（それは主にディートリヒ歴史叙事詩［Historische Dietrichepik］，『ニーベルンゲンの歌』，北欧の『シドレクス・サガ』［Thidrekssaga］などの形で今日にその内容が知られている）に採りながら，そのスタイルは外来のアルトゥース・ロマーンのそれに依存しているということであり，故にある種の違和感を与えるものである。

4） ディートリヒの冒険叙事詩の全体的特徴・研究上の諸問題については，以下を参照：『ズィゲノート』――翻訳と論説，寺田龍男著，北海道大学言語文化部紀要 28（1995 年），275-306 頁。寺田氏はこの論説で，ディートリヒ描写について，口承で広まったディートリヒ伝承が 13 世紀に書承化される際に，口承により伝わるディートリヒの若干粗暴な性格に内省的な側面が加わり，二面性を併せ持つ人物として描かれるに到った，と指摘している（300 ページ以下）。このような性格の二面性の成立についての寺田氏の視点は，本論考において扱うヴィテゲの性格に見られる二面性についての考察においても有益であると考える。なお，この寺田氏の論説が，筆者の知る限り，ディートリヒ冒険叙事詩全般について日本語で書かれてた初の本格的なものである。ディートリヒ冒険叙事詩の文学史的位置づけと本質について理解したければ，この論説から入るのが良いだろう。ドイツ語で読めるディートリヒ冒険叙事詩の概説書としては前掲の，Hoffmann (1974), Wisniewski (1986), Heinzle (1999) がスタンダードである。これらの著作が概説書的傾向を有するのに対し，以下に記す 1978 年のハインツレの著作は，1970 年代の受容理論の影響下，従来の通説であった個の作者による叙事詩テクストの一元的成立観に基づいた解釈を否定し，集団による多元的成立観に基づくモチーフ論・ジャンル論を展開する野心的な研究であったと言える。この著作が 80 年代から 90 年代のディートリヒ冒叙事詩の研究の傾向を確定し，固定化してしまった観が強い。Vogl. Joachim Heinzle: Mittelhochdeutsche Dietrichepik, München 1978.

つまり，それは歴史物語のファンタジー化であると同時に，アルトゥース・ロマーンに描かれる騎士像のパロディー化（地域限定ヴァージョン）と見ることもできるのである。

これらディートリヒ冒険叙事詩の作品は，どれも内容的に完結したものであり，一般に，伝説や他の作品の予備知識がなくても，作品中の人物描写を理解することが可能である[5)]。

このことは，『ヴォルムスの薔薇園』A についても基本的に当てはまる。しかしながら，ときに背景的な伝説の知識を持ち合わせていないと，理解しきれない描写も存在する。そのような描写の好例として，ディートリヒに仕える英雄の一人であるヴィテゲの描写がある。

『ヴォルムスの薔薇園』A で，ディートリヒに仕える英雄ヴィテゲは，薔薇園において二刀流の巨人アスプリアーン（Asprian）と戦うよう命じられる（第 226 詩節）。しかしヴィテゲは巨人に対し恐れをなして拒否し，自分にかくも非情な命令を下すのは，自分が仲間として認められていないからであろう，とディートリヒやその軍師であるヒルデブラントを非難する（第 228, 231 詩節）。ヒルデブラントはヴィテゲに公爵領を与える代わりに出陣するよう要請する（第 234 詩節）が，ヴィテゲは拒否する（第 235 詩節）。それに対しヒルデブラントはヴィテゲに彼の馬ファルケ（Valke）をディートリヒの名馬シェミンク（Schemminc）と交換することを提案し，その保証人の役を自ら買って出る（第 236, 237 詩節）。この提案にヴィテゲは同意し（第 237 詩節），巨人アスプリアーンに立ち向かい，そしてこれを討ち取る（第 238 詩節以下）。

この『ヴォルムスの薔薇園』Aにおけるヴィテゲの描写において，君主ディートリヒに対する反抗的な態度は目を惹く。とりわけ，上述のように

5）もっとも，ディートリヒ冒険叙事詩の諸作品間には共通のモチーフが多く存在し，これらモチーフの予備知識を備えることにより，中世の受容者がテクストを鑑賞する際に，連想を働かせて楽しんだということについては，前掲のハインツレの研究（1978 年）に詳しい。

第 228 詩節，第 231 詩節においては，自分がディートリヒやその家来たちから嫌われているのだ，という発言をしていることに注目したい。以下に引用し詳しく見てみよう。

Rg. A, 228. Dô sprach der helt Witege: ‘daz râtet ir mir sît
daz ich bin bie ellende, des enkilte ich manege zît,
daz ir mich heizet strîten mit des tiuvels man,
und wæret ir mîne vriunde, ir soltet ez hân gelân.

すると英雄ヴィテゲは言ったのだ。「あなた方がさようなことをわしに勧められるのは，わしが仲間内で除け者にされておるからじゃ。それでいつもわしは酷い目にあうのじゃ。あなた方がかの悪魔の手下と戦えなんぞとわしに命じるとは。あなた方がもしもわしの味方じゃというのなら，そんなことをなさっておらんはずじゃ。

Rg. A, 231, 1–2. ‘Wie hazzet ir mich sô sêre, als ich iuwer vînt sî?
doch ist der ungehiure vor mir strîtes vrî’,

何故，貴殿らはわしをそれほどまでに憎むのじゃ？　まるでわしが貴殿らの敵であるかのように。断じてあの馬鹿でかい男はわしと戦うことはないのじゃ。

『ヴォルムスの薔薇園』Aと素材面で近い関係にあると考えられる『ラウリーン』A（“Laurin A”, また “Der kleine Rosengarten” すなわち『小薔薇園』とも呼ばれる）においては，自分達を罠にはめようとする小人王ラウリーンの誘いに対し，その誘いに簡単に応じようとするディートリヒやヒルデブラントらと異なり，ヴィテゲはあくまで疑念を抱く人物として描かれている[6)]。しかしディートリヒやヒルデブラントに反抗したり，反

6）Laurin A 866-68, 884-885, 930-32, 970-72.

感を抱いてはいない。『ラウリーン』Aではむしろディートリヒへの尊敬の念を表している。ここでヴィテゲは,

Laurin A, 23-25.
ich weiz in niht in allen landen,
der sô gar lebe ân alle schande
alsô der edel Dietrîch.
わしは諸国あまねく見回しても，生まれ尊きディートリヒ様ほどに全ての恥辱と無縁に生きているような方を知らぬ。

と，ヒルデブラントに対して言うのである。このように姉妹編とも呼ぶべき関係にある『ラウリーン』Aと比較してみると，『ヴォルムスの薔薇園』Aのヴィテゲの反抗的態度は際立っている。

前述のように『ヴォルムスの薔薇園』Aはディートリヒ冒険叙事詩の一つに位置づけられるが，その反抗的なヴィテゲ描写は，ディートリヒの半生の苦難を描いているディートリヒ歴史叙事詩のジャンルの作品『ディートリヒの流浪』(Dietrichs Flucht, 略称 DF)，『ラヴェンナの戦い』(Rabenschlacht, 略称 RS）に描かれるディートリヒの敵対者としてのイメージと重なるように思われる。これらの作品でヴィテゲは主君ディートリヒを裏切る人物として描かれているのであり，実際，彼はその裏切りによってディートリヒの生涯を大きく狂わせる人物として知られていたのである。

## ディートリヒ歴史叙事詩

ディートリヒ伝説は，実在した東ゴート王テオデリーヒ（Theoderich）の生涯についての言い伝えが伝承された結果生まれたものである。

ディートリヒ伝説を伝える最も古いドイツ語テクストは古高ドイツ語で書かれた『ヒルデブラントの歌』(Hildebrandslied）であるが，中高ドイ

ツ語テクストの最古のものは『ニーベルンゲンの歌』であり，その後半部がディートリヒ伝説の世界を伝える中高ドイツ語の叙事詩として最古の情報源である[7]。と同時に，ディートリヒ伝説を扱った叙事詩の中で，今日ではこの『ニーベルンゲンの歌』の後半部が最も有名である，と言えよう。『ニーベルンゲンの歌』の成立は 13 世紀初頭とされている[8]。この大叙事詩の影響によって，13 世紀にディートリヒ叙事詩が陸続と世に出た。その意味では，『ニーベルンゲンの歌』によってディートリヒ伝説はドイツ語文学の領域に定着した，と言っても過言ではない。

その『ニーベルンゲンの歌』の影響もあるかもしれないが，13 世紀後半に成立したディートリヒ歴史叙事詩の諸作品も陰鬱な雰囲気を引き継いでいる。それぞれのテクストは個別の事件を扱っているが，これらの作品はいわば一つのシリーズを形成し，ディートリヒの生涯を描いている。

『ディートリヒの流浪』（1275 年ごろ，もしくは 1295 年ごろに成立したとされる）[9] は，ディートリヒが叔父であるエルメンリヒ（Ermenrich）王によって攻められ，戦には勝利する（一度目の戦い）も裏切り者ヴィテゲらの策略により家来を人質にとられ[10]，全領土[11] を手放さねばならな

---

7）20 世紀前半以降の『ニーベルンゲンの歌』成立過程についての研究を決定付けたアンドレアス・ホイスラーの著作では，バイエルンにおいて既に 8 世紀にディートリヒ伝説がブルグント伝説と混ぜ合わされたとされている。Vgl. Andreas Heusler, Nibelungensage und Nibelungenlied, Darmstadt 1973.（Die erste Auflage 1920）, S.31f.

8）Vgl. Werner Hoffmann, Das Nibelungenlied, Stuttgart 1992, S. 104ff. あるいは，Vgl. Ursula Schulze, Das Nibelungenlied, Stuttgart 1997, S.54ff.

9）Vgl. Wisniewski, a.a.O., S. 134.

10） 戦の報償のための十分な財をディートリヒが持ち合わせていなかったため，家来たちが自分たちで主君のために供出しようと，財をベルネの都に運んでいる途上で，ヴィテゲらが率いる部隊に襲われ，連行される（DF3584ff.）。

11）「ローマ帝国」（romisch riche，DF3981. 他）を渡すように，とエルメンリヒは何度もディートリヒに対し要求する。この『ディートリヒの流浪』

くなるくだりを描く。ディートリヒはその後はエッツェルの宮廷に身を寄せて，その后ヘルヒェ（Helche）と辺境伯リューディゲールの友情に支えられ[12]，自分の所領を奪還すべく軍を起こし[13]，ミラノ近郊で激戦の末にエルメンリヒ王の軍を壊走させ勝利する（二度目の戦い）。敵方のヴィテゲはディートリヒに仕えることになり[14]，代官が戦死したラヴェンナの統治を任される。その際，ディートリヒはヴィテゲに名馬シェミンクを与える。その後，ヴェローナ，ミラノなどに代官を置きディートリヒとヒルデブラントらはエッツェル宮廷に戻る。エッツェル，ヘルヒェ夫妻の勧めにより，ヘルヒェの姪のヘルラート（Herrat）と結婚するが[15]，宴の

---

においては，ディートリヒは「ローマ国の王」（chunich von romisch lant, DF3203 他）といった呼び名でしばしば呼ばれている。とはいえ，ディートリヒの王国の都はローマではなくベルネ（Berne，ヴェローナ）である。

12）グランの町へ落ちのびると，そこで偶然にもフン王エッツェルの后ヘルヒェと辺境伯リューディゲールの一行が滞在する。リューディゲールはディートリヒらを保護し，彼をヘルヒェと引き合わせる。リューディゲールとヘルヒェは馬や武具，財宝など必要な品々をディートリヒの一行 50 名のために提供する。ヘルヒェは極めて同情的な態度で，全面的な支援を約束し，夫であるエッツェル王やその重臣たちを動かし，ディートリヒの領土奪還作戦を支援するための兵を出させるのである（DF4546ff.）。

13）ヒルデブラントの義弟である重臣のアメロルトが，エルメンリヒ王によって占領されていたベルネを，王が遠征した隙にわずかな兵をもって奪取し，アルプハルトを名代として据え，ディートリヒの元へ急行，急ぎ援軍を要請する。それに呼応しディートリヒはエッツェル王の支援で軍を起こす（DF5485ff.）。

14）このとき他の捕虜は身代金と引き換えにエルメンリヒの元へ帰っている。何故，ヴィテゲだけがディートリヒの元に残った（DF7130ff.）のかについては，明確な理由が記されていない。若き日のディートリヒとヴィテゲとの主従関係はディートリヒ冒険叙事詩によって広く知られるが，『ディートリヒの流浪』にはそのような過去の主従関係に言及する箇所はなく，彼のみ残った理由は謎なのである。

15）婚儀の途中でヴィテゲの裏切りの報に接し，ディートリヒとヘルラートはこのとき初夜を共にしない（DF7666ff.）。続編の『ラヴェンナの戦い』

途中で急使が到着し，ヴィテゲが再度裏切り，ラヴェンナをエルメンリヒに差し出したという報告を受ける。エッツェルの援助を得て，ディートリヒは遠征軍を率い，ボローニャ郊外でエルメンリヒ軍を撃破する（三度目の戦い）。しかしこの戦いで家来のアルプハルト（Alphart）らを失い嘆く。

『ラヴェンナの戦い』（13 世紀後半，DF に先立って成立したと考えられる）[16] においては，アルプハルトを失い嘆き悲しむディートリヒが，ヴィテゲによってエルメンリヒ王に引き渡されたままになっていたラヴェンナの奪還を企てエッツェルの支援で遠征軍を起こす（四度目の戦い）。その際，従軍した自分の弟ディートヘル（Diether），エッツェルの二人の息子オルテ（Orte）とシャルフェ（Scharphe）が[17]，単独行動中にヴィテゲに遭遇し，決闘の末に三人とも殺される。この戦いではディートリヒは領地を取り返すが，逃げてゆくヴィテゲを捕え損ねる。ヴィテゲがかつてディートリヒから贈られた名馬シェミンクに乗っていたため，ディートリヒの愛馬ファルケでは追いつけないのである。エルメンリヒもラヴェンナに逃げ込み，ディートリヒの追跡にも拘わらず，逃げおおせる。二人の王子を失ったエッツェル，ヘルヒェは嘆き悲しむ。しかし，リューディゲールの証言により，夫妻はディートリヒに罪の無いことを知り，彼の罪を問わない。

なお，時系列的な関係から言えば，この後に，エッツェルの后ヘルヒェ

---

において四度目の戦いの前に盛大な結婚の宴が執り行われ，二人は晴れて結ばれるのである（RS. Str. 87ff.）。

16）Vgl. Wisniewski, a.a.O., S. 139.『ディートリヒの流浪』と『ラヴェンナの戦い』は，中世において，常に一緒の写本で伝承されていたのであり，相互の内容的なつながりが当時から強く意識されていたことが伺える。Vgl. ebd.

17） エッツェルの二人の王子は，ディートリヒに従軍したいと言い張り，母ヘルヒェを手こずらせるが，ディートリヒは彼らの保護を約束して同行を許し，ベルネの代官エルザン（Elsan）に預けるが，彼らはエルザンの言うことを聞かず，町の外に出てしまいヴィテゲに遭遇する（RS. Str. 375ff.）。

が死に，それに伴い，ジークフリートが殺されたために未亡人としての生活を送っていたブルグント族のクリエムヒルトが使者リューディゲールの説得でエッツェルの後妻として稼ぐ。やがて彼女はエッツェル宮廷で力を蓄え，仇敵ハゲネに対する復讐を行なうのだが，それは『ニーベルンゲンの歌』後半部に描かれるところである。

ディートリヒの苦難の日々を扱うこれらの叙事詩は，内容からすれば当然であろうが，ファンタジーを基とするいわゆるディートリヒ冒険叙事詩の諸作品に比べて，トーンは暗い。特に『ディートリヒの流浪』では，ディートリヒが武芸に優れ決闘で活躍する英雄というわけではなく，むしろ彼は武人というより貴族と呼ぶにふさわしい。治世に心掛け，またエルメンリヒ王に国を奪われて悲嘆し，涙を流し頭を垂れて王に温情を求めるも拒否される。乗馬を禁じられ徒歩で国外退去せねばならぬ落ち武者の不遇の身を恥じ，家来やエッツェル王，ヘルヒェらに慰められてもなおも落ち込み続ける，弱々しい表情を見せる。このようなディートリヒの表情は，13 世紀の貴族の繊細な一面を垣間見させてくれる描写として，そのリアリティーを評価すべきものかもしれない。またその一方で戦いの描写も激しさ，残忍さが強調される。エルメンリヒに占領されたラヴェンナの町が乱暴狼藉の限りを尽くされ，火を放たれ，多くの貴婦人たちが斬首され，子供たちが絞首刑に処せられる，といった生々しい場面が描かれる。戦闘場面についても，一対一の馬上槍試合での絶対的な強さを見せる騎士はおらず，『ニーベルンゲンの歌』のジークフリトやハゲネのような超人的な英雄が武力によって押し寄せる敵を稲でも刈るように太刀を振るって薙ぎ倒す，といった場面はほとんど無い。その意味でも現実的描写が多い。

これらの叙事詩の作者の執筆態度は歴史家のそれであり，真実味を持たせたいという気持ちが，リアリティーを強調させたのであろう。ただし，『ディートリヒの流浪』の戦闘描写を中世における現実の軍事的常識に照らして検証した寺田龍男氏の指摘によれば，そこに表れる「現実味」は，

必ずしも「現実」を反映していたのではなく，それはあくまで作者たちが知りえた範囲での知識に基づくものであり，執筆に際し用いた表現技法も，古典作品に依拠したもので，ある種の型に従う旧来の慣習に縛られたものであったという[18)]。

このように，ディートリヒ歴史叙事詩の叙述は必ずしもリアリティーを保持したものでなく，それらは多分に詩的変容を経験している。中世の詩人たちが一般的に用いた共通のモチーフや言い回しなどの影響によって，作者の表現はおのずと制約されているのであり，必ずしも写実的に現実を見たまま記すわけではないのである。

とは言うものの，ディートリヒ歴史叙事詩は他の中高ドイツ語の叙事詩群と比較すれば，歴史的現実性うんぬんはともかく，少なくとも読者達に歴史的真実性を強く意識させていたであろうことは想像に難くない。近代的な意味での歴史主義に基づくならば，叙事詩と歴史上の現実とはあくまで隔たりがあったことは認めざるを得ないが，しかし，その物語の中には，フィクションとは歯応えの異なる，史実に由来する何か硬質なものが詩的に未消化のまま残されているのである。

そこで，この史実的な過去の痕跡についても，その起源を遡ってみたい。つまり，英雄ディートリヒ・フォン・ベルンやヴィテゲにまつわるエピソードが，どのような史実を元に成立したのかを以下に略述する。

## 史実から伝説へ

ディートリヒの 30 年間の亡命生活は，実在の東ゴート王テオデリーヒ（Theoderich，451? 年～ 526 年）の 30 年間の他国生活と戦いの日々（ビ

---

18）Vgl. Tatsuo Terada: Literarische Darstellung eskalierender Schlachten im Mittelalter, Ein Ansatz zum Ost-West-Vergleich In: “Von Mythen und Mären”— Mittelalterliche Kulturgeschichte im Spiegel einer Wissenschaftlicher-Biographie, Festschrift für Otfrid Ehrismann zum 65. Geburtstag, Hildesheim. Zürich. New York 2006, S. 635ff.

ザンツ滞在からラヴェンナにおける勝利まで，つまり459年から489年）の時期の出来事を反映していると考えられる[19]。彼は東ゴート族の君主の家に生まれながら，人質としてコンスタンティノープルの東ローマ皇帝の元に過ごす身となる。やがて部族に戻って将軍として家来を率いて転戦し，東ローマ皇帝に仕えるも，皇帝やその幕僚との政治的駆け引きを繰り返しながら，その後，十万の人々を率いて西方のイタリアへと向うのである。そこで西ローマ帝国を476年に滅ぼし盟主となっていたオドアカル（Odoakar）に戦いを挑み，厳しい戦いと外交的かけひきの末にヴェローナ，更にはラヴェンナを奪取して宿敵オドアカルを謀殺する。このようなディートリヒをめぐる歴史的事件の数々が数百年の時を経て伝説へと変化していった[20]。もっとも最終的に複数の現存する叙事詩テクストから知ることができるその内容は，必ずしも史実上の時系列的な関係と合わない部分も多い[21]。

---

19）テオデリーヒの生涯については以下を参照。Vgl. Heinzle, 1999, S. 2ff., Wisniewsski, 1986, S. 25ff.

20）史実がディートリヒ伝説へと変容していった過程については，ハインツレが考察している。Vgl. Heinzle, a. a. O., S. 5ff.

21）そもそも伝説ではディートリヒがエッツェル王，つまり史実上アッチラとして知られている人物，の傘下に入ることになっているが，史実上はアッチラ王はテオデリーヒが生まれた頃（453年）に死去している（テオデリーヒの生年については，あまり確定的ではないらしく，各書ともおおよそ450年代前半であるとしているか，明記せずに済ませている場合が多い）。また伝説上ディートリヒは叔父のエルメンリヒによって領地を追われ亡命生活に入るわけであるが，このエルメンリヒ王のモデルとなった東ゴート族のエルマナリーヒは同部族の英雄であり，4世紀中ごろ（つまりディートリヒが活躍する1世紀ちかくも前）にキエフの北部からバルト海に至るまでの広大な土地に支配権を及ぼした人物であった。彼の王国はフン族進出の圧力に抗しきれず瓦解する。この後，押し寄せるフン族に対抗できず，東ゴート族はその支配下に入ってゆく。そしてかつてエルマナリーヒが支配した広大な東欧の地域をアッチラ（＝エッツェル）が支配することになる。453年にアッチラが死去するまでの5世紀前半の約半世紀は，東ゴー

ところで，ヴィテゲのモデルとなった人物も特定できるのであろうか。ヴィスニエフスキは，このヴィテゲという人物について歴史上のモデルとなった可能性のある人物として，三人の名前を挙げる。すなわち，330 年にサルマート族に対する戦いで功績のあった東ゴート族のヴィディゴジャ（Vidigoja）あるいは 536 年に，テオデリーヒの後継者となった甥のテオダハード（Theodahad）を殺してアマル族の王統を絶ち，東ゴート王となったヴィティギス（Vitigis）である。あるいはテオデリーヒの宿敵オドアカルに仕えた将軍トゥーファ（Tufa）の存在がこのような裏切り者像に影響を与えた可能性も示唆されるという。このトゥーファはオドアカルを裏切って，テオデリーヒ陣営についた後に，再び裏切ったのだという[22)]。おそらくこれらのモデルのうちから一人を確定することは不可能であろうし，またその必要も無いであろう。これら複数のモデルのイメージが重なり一つにまとまって，伝説上の人物像が形成されていったと考えるのが妥当であろう。

いずれにせよ，このヴィテゲには裏切り者のイメージが付いて回るので

---

ト族が周辺のゲルマン諸部族に敵対しながらフン族への服従を守った時代だったのである。

また，伝説ではディートリヒがエルメンリヒ王の姦計や家来の裏切りに遭い，ベルネ（＝ヴェローナ）を離れなければならなくなるのであるが，史実においてはテオデリーヒ王はライバルのオドアカルを騙して投降させた後に，一族もろとも殺してしまっている。このことからも，テオデリーヒの実像と伝説との間に大きな乖離があることが伺える。更に言えば，テオデリーヒは長きにわたり平和を実現した名君として評価される一方で，哲学者ボエティウスを死刑に処して，それがために中世において教会から非難されていた。伝説上のディートリヒが口から火を吐くのも，そのようなイメージが原因とされる。すなわち悪魔の手先として見られたのである。しかしながら，このような教会によって張られた否定的なレッテルが，彼の人気を下げた訳ではない。彼は最も人気のある英雄として知られたのである。Vgl. Heinzle, a. a. O., 2ff.. Wisniewski, ebd.

22）Vgl. Wisniewski, S. 46.

あり，ディートリヒ歴史叙事詩の記述を根拠にその理由を記すとすれば，次のようにまとめることができよう。

1）元々若き日のディートリヒに仕えていながら，エルメンリヒ王の陣営に移り，そして部隊を率いてディートリヒの家来たちを人質にとって彼らを国外退去へ追い込むこと（DF3683ff.）。

2）ディートリヒに赦され辺境伯としてラヴェンナを委ねられたにも拘わらず，再び裏切りそれをエルメンリヒ王に明け渡すこと（DF7695ff.）。

3）ラヴェンナ奪還作戦の際に，まだ子供であるエッツェル王の二人の王子とディートリヒの弟と決闘して，いずれも討ち取ってしまうこと（RS375, 1ff.）。同様に『アルプハルトの死』に描かれているように，まだ子供であるアルプハルトをハイメと二人がかりで（たとえば AT288, 2 他）打ちかかり，殺してしまうこと。

このような「歴史上」の人物としてのヴィテゲの裏切り者としてのイメージは，本来彼が忠臣として主君に仕えているはずのディートリヒ冒険叙事詩のジャンルに属する『ヴォルムスの薔薇園』Aの中にまでも入り込んだのだと考えられる。ただし，そのイメージはそう単純ではないと思われる。

というのも，注意すべきことに，ディートリヒ歴史叙事詩に描かれるヴィテゲは確かに裏切り者なのであるが，必ずしも一言で悪逆無道の大奸物であると言い切れぬのである。前述の 1）から 3）の理由のうち，1）と 2）は『ディートリヒの流浪』に記されるエピソードであるが，これらに描かれるヴィテゲは何ら自らを省みることなく，裏切り行為にためらいを見せない。それに対し 3）について特に『ラヴェンナの戦い』ではヴィテゲは子供たちと戦いたがらず（RS414, 1ff.），討ち取った後も悩む様子が描かれるのである（RS459, 1ff.，この箇所でヴィテゲは討ち取ったディートヘルの傷口すべてに口づけをし，助けられるなら代わりに自分が死にたい，と嘆く。『アルプハルトの死』のヴィテゲはこれに比べると良心の

欠如が目立つが，それについては後述する）。

このようにディートリヒ歴史叙事詩の作品に表れるヴィテゲの描写は，大胆不敵に主人や仲間を裏切って恥じることを知らない姿と，自分の行為に悩む姿と二つに分かれるのである。このようなヴィテゲの性格についての二面性は，13 世紀のドイツ語圏において広く知られ，そのような複雑な人間像ゆえに，この人物はディートリヒに対するアンチヒーローとして一定の存在感を獲得していたのではないか，と考えられよう。冒険叙事詩である『ヴォルムスの薔薇園』Ａおよび，その改作とも目されるＤの作者も，この人物の性格描写にはそれなりのこだわりを見せている。裏切り者の烙印を押されているヴィテゲであるが，打算で行動するドライな側面のみならず，仲間から孤立しているという悩みを吐露する気弱な側面もまた描かれるのである。Ｄヴァージョンのヴィテゲ像について以下詳しく見て行くが，その前に，このＤヴァージョンの物語をディートリヒ歴史叙事詩の文脈の中でどのように位置づけるべきであるのかについて考えてみたい。

## 『ヴォルムスの薔薇園』Ｄの物語の時期設定

13 世紀中頃の『ヴォルムスの薔薇園』Ａの成立後の 13 世紀後半，おそらくは 1280 年頃とも言われるが[23]，このＡヴァージョンの影響を受けて

23）H. ドゥ・ボーアは『ヴォルムスの薔薇園』A については 1250 年ごろ，D ヴァージョンについては 1280 年ごろ成立としている。Vol. Helmut de Boor, Die literarische Stellung des Gedichtes vom Rosengarten in Worms In : Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur (= Beitr.) 81(1959), S. 371ff. (wieder in : H. de B., Kleine Schriften II. Berlin 1966, S.229ff.). W. ホフマンもこの見解を踏襲している。Vgl. Hoffmann (1974), S. 184. この見解は 19 世紀以来の主流の見解であるといってよい。もっとも，J. ハインツレは，『ヴォルムスの薔薇園』が 13 世紀前半の遅い時期には成立していた可能性もある，と示唆している。Vgl. Heinzle, 1999 S. 178f. なお，A と D のヴァージョンの成立期と両者の相互関係については 19 世紀前半より長く議論されてきたが，ここでは紙幅の都合上詳細については省略したい。この件についての詳細は以下の拙論をご参照いただきた

書かれたであろうと考えられるのが『ヴォルムスの薔薇園』Ｄである。このＤヴァージョンでは，Ａヴァージョンに登場していないフン族のエッツェル王が登場し，それに伴い，エッツェル王の后ヘルヒェも登場する。Ａヴァージョンの物語をベースに登場人物やエピソードを付け足しているのが特徴である。ディートリヒは彼の配下として臣従している様子が描かれている。Ａヴァージョンが 390 詩節（いわゆるヒルデブラントトーンの詩形で一詩節四行ずつ，各行は四強拍の長詩行と三強拍の短詩行とに分かれる。有名なニーベルンゲン詩節と似ているが，ヒルデブラントトーンは四行共に同じ強拍数であるのに対し，ニーベルンゲン詩節では最後の一行だけ二つの四強拍ずつの長詩行によって構成される）の長さであるのに対し，Ｄヴァージョンは同様の詩形で 633 詩節と全体的に長くなっている。

Ａヴァージョンには記されずＤヴァージョンにおいて加えられたディートリヒのエッツェル王に対する臣従は何を意味するのであろうか。

Ａヴァージョンではディートリヒは都のベルネを支配する独立した支配者であり，『ディートリヒの流浪』の記述を頼りにディートリヒ歴史叙事詩群の時系列的関係に従うのであれば，彼が叔父であるエルメンリヒ王に侵略されて領土を立ち退かねばならなくなる一度目の戦いの前の時期を舞台としている，という結論に達しよう。

それに対しＤヴァージョンにおいては，既にエッツェルに臣従していて，しかも都のヴェローナも奪回している状況が描かれているので（Rg. D, 15），『ディートリヒの流浪』の時系列と照らし合わせて考えるのであれば，一度目の戦いが終わった後に，ディートリヒの部下のアメロルト（Amerolt）が奇策を用いてベルネを奪還した（DF5487）後の時期のことである，ということになる。更に，Ｄヴァージョンに登場するこのアメロルトは『ディートリヒの流浪』では三度目のボローニャ郊外の戦いで命を落とすので（DF9690），Ｄヴァージョンの舞台は一度目の戦いと三度目

い：英雄叙事詩『ヴォルムスの薔薇園』研究の歴史と動向（慶大独文学研究室『研究年報』第 16 号，1999 年，１～22 頁）。

の戦いの間の時期，ということになろう。また，ヴィテゲがディートリヒに仕えていることを考えると，ミラノ郊外における二度目の戦いで（かつて裏切った）ヴィテゲが捕虜となりディートリヒに投降して再び部下として仕えることになる出来事（DF7130ff.）の後，ということも言えよう。したがって，この時点でＤヴァージョンの時期設定は『ディートリヒの流浪』における二度目の戦いの後から三度目の戦いの前，ということになる。

Ｄヴァージョンの時期設定の大枠はこれでとりあえず決ったと仮定しよう。既に一度国を追われエッツェルの元に身を寄せていながら，しかも故郷ベルネを奪還し，そして裏切り者のヴィテゲがディートリヒの元に戻って来ていて，かつ部下が命を落として悲嘆に暮れる時期の前というのは，二度目の戦いと三度目の戦いの間の時期しか可能ではないからだ。

とはいうものの，このようなＤヴァージョンの物語の時期設定は矛盾が無いとは言えない。ここに記した時期設定に明らかに矛盾してしまうエピソードを挙げるとすれば，ディートリヒの従兄弟であるハールンゲン兄弟（Rg. D, 82, 4.）の存在であろう。このハールンゲン兄弟は『ディートリヒの流浪』において既に一度目の戦いの前にエルメンリヒ王に殺されている（DF2551ff.）にもかかわらず，Ｄヴァージョンに登場しているからである。このことを考慮に入れるのであれば，Ｄヴァージョンの時期設定が一度目の戦いの前の時期ということにならざるを得ない。

更にはそもそも，ディートリヒの古くからの家来であり友人で，やがて裏切り『ディートリヒの流浪』では既に一度目の戦いの前からエルメンリヒ王に仕えているハイメ（Heime）が，Ｄヴァージョンにおいてはまだディートリヒの側で活躍している。

『ディートリヒの流浪』との対比でＤヴァージョンの時期設定を行うとき，エッツェルへの臣従を重視するなら二度目の戦いと三度目の戦いの間の時期ということになり，ハイメの存在およびハールンゲン兄弟がまだ生存しているということを重視するのであれば，一度目の戦いの前の時期である，ということに論理的には帰結しよう。いずれにせよ，時期設定につ

いて言えば，ここで挙げた二つの条件を同時に満たすことは不可能なのであり，敢えて結論を出そうとすることは，解の無い連立不等式を解こうとするに等しいのである。

Ｄヴァージョンに関して，とりわけ多くの問題をはらんでいるのがヴィテゲの描写である。彼はこのＤヴァージョン中，三人の重要登場人物の殺害に関っていて，それが『ディートリヒの流浪』の他，『ラヴェンナの戦い』，『アルプハルトの死』といったディートリヒ歴史叙事詩，更に『ニーベルンゲンの歌』との関連づけを可能にしている。

このヴィテゲという人物にどのような性格設定がなされているのかということに触れながら，Ｄヴァージョンのヴィテゲ描写の特徴と，ディートリヒ歴史叙事詩等との関係について明らかにしてゆきたい。

## 『ヴォルムスの薔薇園』Ｄのヴィテゲの描写

Ｄヴァージョンでヴィテゲがディートリヒらに反抗する場面はＡの内容とほぼ一致している。その上で，ヴィテゲの人物造形は，Ａに描かれる原型を活かし，それに予備知識を肉付けする形で行われている。その原型の核とは薔薇園で巨人アスプリアーンと戦う見返りとして名馬シェミンクをディートリヒから貰う，というエピソードである（A236, D316）。もっとも，このエピソードは『ディートリヒの流浪』と異なる。そこではミラノ郊外の二度目の戦いの後に，服従を誓ったヴィテゲに対し褒美としてこの名馬が与えられることになっている（DF7192ff.）。

このＡヴァージョンに書かれるエピソードを核に，Ｄヴァージョンでは更に名馬シェミンクはヴィテゲの父ヴィーラント（Wieland）が山から連れ出しヴィテゲに与えたものであったが，ガルダでヒルデブラントの弟アメロルトと戦って奪われたのだという過去についてのエピソード（D317）を付け加えている。

Ｄヴァージョンの付け加えはそれだけにはとどまらない。物語の末尾の

第 622 詩節以下でディートリヒ歴史叙事詩によって今日に伝わるエピソードをいくつか加筆するのである。Dヴァージョンにおけるこのような加筆は，単に知識をひけらかす以上の意味を有している。そこではヴィテゲはディートリヒの人生の転機となる事件の犯人となる，ということを暗に示唆しているのである。Aヴァージョンにおいては単にヴィテゲの反抗的姿勢が描かれるのみであったが，Dヴァージョンではそれが「歴史上の」出来事につながったのだという認識が示されていると考えられる。それはすなわちDヴァージョンがディートリヒ歴史叙事詩の世界と接点を有することを積極的に示そうとするものである。

とりわけ前述第622詩節以下のヴィテゲについての記述は，重要である。ヴィテゲの孤独感を強調する描写であり，ヴィテゲが将来においてディートリヒを裏切る存在である，ということが明記されているからである（後で引用し詳述する）。

Dヴァージョンのヴィテゲ描写には，既にAヴァージョンに描かれていた，あくまで裏切り者としてドライに行動する一面に加えて，孤立感を覚え悩む繊細な一面がより強調されて描かれている。ここには 13 世紀後半に裏切り者ヴィテゲの性格的特徴として一般に知られていた二面性が強調されていると言って良い。これらの場面について，Dヴァージョンにおけるヴィテゲ描写を以下に具体的に見てみよう。

［ヴィテゲが仲間への配慮を見せる場面］

Aヴァージョンにおいては見られぬことであるが，Dヴァージョンにおけるヴィテゲは，ディートリヒ配下の味方の武将たちと歩調を合わせようと努力する様子が数箇所で描かれているのであり，味方として周囲と仲良くしようとするための発言も見られる。たとえば，ヴォルムスへの遠征に反対するヴォルフハルト（Wolfhart）の意見に賛同を示す以下の場面。

Rg. D, 60.　Dô sprach Witege der küene: ‘reht alsô ist ouch mir,

und lieze mich mîn herre,　ich belibe hie heime bî dir,’
‘nein’ sprach aber Wolfhart,‘wir wellen alle dar,
und wæren unser tûsent,　gar vrœlîche an die schar’

すると勇者ヴィテゲが言ったのだ。「まさに私も同感だ。もしも我がご主人が私をこの地においてゆくとおっしゃるならば，私は貴殿とともにここに残ろう。」「いいや。」とヴォルフハルトは言い返したのだ，「我らは千人いようとも，意気揚々一丸となりかの国へ従軍いたそう。」

ヴィテゲはヴォルフハルトに賛同するのに，当のヴォルフハルトは彼を冷たく無視する。このあたりのヴィテゲを取り巻く微妙な人間関係を扱う細やかな描写はAヴァージョンには見られず，Dヴァージョンの作者が特別に意識したところであろう。

また，以下に紹介する箇所では，この同僚ヴォルフハルトがヴィテゲに対し嫉妬の念を抱く様子が描かれる。

［ヴィテゲが仲間内で孤立していることを示す］

Rg. D, 620.　Wolfharten übel muote　und was im alsô leit,
daz Witege der küene　Schemminc daz guot ros reit,
daz im in dem garten　ze solde was gegeben:
daz begunde müejen　Wolfharten den degen,

ヴォルフハルトは機嫌が悪く，たいそう心を痛めていた。というのも勇者ヴィテゲが，薔薇園で褒美として与えられた名馬シェミンクを乗り回していたからだ。それを見て武人ヴォルフハルトは心を痛めたのである，

このような同僚からの敵意をヴィテゲも強く意識していることが次の描写からも読み取れる。

［ヴィテゲが孤立感を感じていることを示す］

Rg. D, 622, 1–2.　Ich weiz niht wol warumbe, ez dünket mich niht guot,
daz mich sô sêre hazzet　der Wülfinge übermuot.

わたしには何故だかよく分かりませんが，ヴュルフィングの衆が高慢にもわたしのことをいたく嫌っているということは面白くないものです。

このようなヴィテゲの苦悩を見て，ディートリヒは彼が裏切ることを警戒し，次のように言うのである。

［ヴィテゲが裏切ろうとしていることをディートリヒが察している箇所］

Rg. D, 623.　Dô sprach gezogenlîche　von Berne her Dietrîch:
‘welt ir dan hinnen rîten　ze künec Ermenrîch,
sô gedenket an die eide,　die ir mir hât gesworn,
darane sült ir niht wanken,　ir recke hôchgeborn.’

それに対してベルネのディートリヒ殿は威儀を正して言ったのだ，「貴殿がエルメンリヒ王のもとへと行きたいというのであれば，貴殿が余に誓った誓約[24]のことを思い出してみられよ，高貴なる勇者よ，貴殿はその誓いを違えてはならぬぞよ。」

これに対し，ヴィテゲは以下のように曲者らしく面従腹背の姿勢を見せる。

［ヴィテゲがやがてアルプハルトを討つことを予告する］

Rg. D, 624.　‘Jâ, wolte ich wanken,　vürste vil gemeit,
mîn lîp der sî verwâzen,　briche ich den eit.’
dannen vuor dô Witege　ûf der selben vart.

24）この誓約がどのようなものかは明らかでない。

daz kam sider ze leide　dem jungen Alphart.

「はい，もしも私が背こうものなら，英邁なる殿よ，わたしの身が呪われればよい，もしも私が誓いを破りましたなら。」そしてヴィテゲもその場を立ち去ったのだ。このことは後に若者アルプハルトにとって災いとなった。

義に厚い他の武将であれば，ヴィテゲが言った言葉は，ディートリヒに対する忠誠へと自分を縛り付ける誓いとなったであろう。しかしヴィテゲは，この上の言葉を文字通り実践する人物であった。つまり呪われること（verwâzen sîn）を怖れないのであった。故に，彼はこの言葉通りに裏切り，人々に呪われる存在となるのである。

## 『ヴォルムスの薔薇園』Dのアルプハルトの死をめぐって

『ヴォルムスの薔薇園』D第624詩節最後の行に言及されるアルプハルトは『ディートリヒの流浪』によれば，ディートリヒがボローニャ郊外でエルメンリヒ軍を撃破した三度目の戦いで死んでいる（『ラヴェンナの戦い』においても言及されるが，詳細には触れられていない）。前述のようにDヴァージョンの物語がヴィテゲが投降したミラノ郊外の二度目の戦いと，ヴィテゲが再び裏切ったことにより起こるボローニャ郊外の三度目の戦いの間の時期を描いている，という時期設定ならば，上の引用部分を三度目の戦いにおける戦死のことを指すのだと理解すれば整合する。

とはいえ，やはりこのような仮定は問題が残る。というのも，『ディートリヒの流浪』によればアルプハルトは三度目の戦いでヴィテゲとは別の武将に殺されるのであるから（しかも二度も別の人物に殺されるという内容的矛盾が存在している）[25]。また『ラヴェンナの戦い』には誰がアルプ

25）アルプハルトは一度目はピトルンクに（DF9509），二度目はアメロルトら他の七人の仲間と共にライヒャーに殺される（DF9681）。このアルプハ

ハルトを殺したのかは記されていない。このことから，『ディートリヒの流浪』，『ラヴェンナの戦い』との対比によって『ヴォルムスの薔薇園』Dにおけるヴィテゲのアルプハルト殺害の時期を特定することは無理がある。

このヴィテゲによるアルプハルト殺害の言及に関していえば，『ディートリヒの流浪』及び『ラヴェンナの戦い』とともにディートリヒ歴史叙事詩の一つとされる『アルプハルトの死』も重要である。この作品ではヴィテゲはハイメ（Heime）と共にアルプハルトを殺害するからである。もっとも，この『アルプハルトの死』においてヴィテゲとハイメに少年アルプハルトが殺されるのが，ディートリヒ歴史叙事詩の四度の戦いの順番で言うといつなのか，ということは定かではない。一番目の戦いから四番目の戦いの前までの時期であればどの時期でも当てはまりそうに筆者には思われるのである。

この『アルプハルトの死』は，13 世紀後半に成立したと考えられており，[26]『ディートリヒの流浪』と『ラヴェンナの戦い』を受容したとも考えられている[27]。『ヴォルムスの薔薇園』Dとの関係でもおそらく同時代の作品と言ってよいだろう。

そしてこの『アルプハルトの死』は『ラヴェンナの戦い』と内容的にパラレルの関係に置かれる[28]。この『アルプハルトの死』においても，『ラヴェンナの戦い』においても，物語の中核部分は裏切り者ヴィテゲによる子供の殺害の場面である。両作品においてヴィテゲはディートリヒと縁の深い子供を討つことをためらうのであり，それゆえの彼の苦悩が描かれる。

---

ルトの死の描写の矛盾の原因をめぐっては，寺田龍男氏が詳細な検証を行っている；Alphart は二度死ぬ――„Buch von Bern“ におけるある矛盾について――，寺田龍男著，小樽商科大学『人文研究』(76), 75-106 頁, 1988 年。

26）Heinzle(1999), S. 89ff.

27）Vgl. a.a. O., S. 91.

28）Vgl. Helmut Rosenfeld, Alpharts Tod In：Verfasserlexikon, BD1 1988, Sp. 258ff.

そのような共通点があるものの，両者のヴィテゲ描写を比較するならば，『ラヴェンナの戦い』のヴィテゲがやむを得ず三人の子供たちとの戦いに巻き込まれ，子供殺しの汚名にまみれてゆかざるを得ないのに対し，『アルプハルトの死』のヴィテゲについては，金銀によって釣られてエルメンリヒに仕える様子が描かれ，躊躇するハイメを押し切って卑怯にも二人がかりでアルプハルトを倒す。また倒れたアルプハルトに刀を突き刺し，かき回して殺すという残忍な様子が描かれている。前述のように『ラヴェンナの戦い』ではヴィテゲは殺したディートヘルの傷に涙を流しながら口づけして悔いたのを思い合わせれば，このヴィテゲの残忍な描写は際立ってくる。

『ヴォルムスの薔薇園』Ｄはヴィテゲによるシャルフェ，オルテ，ディートヘルの殺害には触れず，ただ彼のアルプハルト殺害について触れるのみであるから，少なくともこの点については『ラヴェンナの戦い』よりも『アルプハルトの死』からの影響が強かったと言えよう。

## 『ヴォルムスの薔薇園』Ｄのヌオドゥングの死についての素材源

ところで，Ｄヴァージョンおいてはヴィテゲのもう一つの殺害についての言及がある。それはリューディゲールの息子ヌオドゥングに対するものである。

［ヴィテゲがヌオドゥングを殺したことを示す箇所］

Rg. D, 320. Dô wart schiere gewâfent　Witege der küene degen.
umb Rüedegêrs sun Nuodunc wart im ein stætiu suone gegeben.
den schilt bôt ime Heime:　‘got müeze dîn selbe pflegen.’
dô spranc er in den garten,　Witege der küene degen.

そしてすぐさま勇者ヴィテゲの武装は整えられた。リューディゲールの息子ヌオドゥングのことは和解が成立した。ハイメが彼に楯を渡した。「神がおぬしをお守りくださるように。」かくて勇者ヴィテゲは薔

薇園の中へと跳び込んだ。

『ディートリヒの流浪』および『ラヴェンナの戦い』においては，ヌオドゥングは生きており，落命する場面などは描かれない。では，『ヴォルムスの薔薇園』Ｄにおけるヴィテゲによるヌオドゥング殺害の過去についての記述は一体どの作品を素材源としたのであろうか。

リューディゲールとゴテリントの息子であるヌオドゥングが殺害されたことについて言えば，筆者の知る限り本論冒頭に引用した『ニーベルンゲンの歌』1699, 4 に記されるのみ[29] である（『シドレクス・サガ』にも言及はあるが，そこではヌオドゥングはリューディゲールの妻と兄弟の関係にある）[30]。このことから，Ｄの作者は『ニーベルンゲンの歌』を細かく読んで，それを素材源として用いたのだ，という可能性が高まってくるだろう。しかし，『ニーベルンゲンの歌』には，ヴィテゲがいつどのようにヌオドゥングを殺害したのかについて記されていない。

## 結語

『ヴォルムスの薔薇園』Ａ，Ｄは，一見すると独立した冒険物語の形式をとっている。しかし，この作品において見逃せないのは，ディートリヒ歴史叙事詩の時系列を強く意識して書かれている，ということである。その際の手がかりとなるのはヴィテゲの描写である。伝承のより初期的段階

---

29）Vgl. George T. Gillespie, : A catalogue of persons named in german heroic literatur, Oxford 1973., p.99.

30）ドイツの伝承を元に 1250 年ごろにノルウェー語で書かれた『シドレクス・サガ』によれば（以下，The saga of Thidrek of Bern, translated by Edward R. Haymes, New York & London 1988 に依拠），エルメンリヒ軍との戦いで，ヴィテゲによってエッツェルの二人の王子とディートリヒの弟ディートヘルと共に，このヌオドゥングも殺される（203 頁）。ただしここでヌオドゥングはニューディゲールの妻のゴテリントの兄もしくは弟である（225 頁）。

であるAヴァージョンにおいて，既にヴィテゲのディートリヒに対する反抗的姿勢，それに彼が同僚から孤立している様子が描かれる。

Dヴァージョンにおいては，ヴィテゲについての記述がより細かくなっている。更に人物描写に関しても，ヴィテゲの二面的性格がAヴァージョンに比べDヴァージョンにおいてはよりはっきりと強調されている。それによって褒美目当てに主人に反抗するドライな性格の者という負のイメージにも拘わらず，仲間との共感を欲し，それがかなわぬことを嘆くウェットな性格の人間というイメージも付与されて，この二面性により人物像が立体感を増している。

更にDヴァージョンでは，ヴィテゲが仲間に嫌われているということ，またいずれ裏切る存在であるということが暗示されている。それらの箇所はディートリヒ歴史叙事詩に描かれている内容との接点を成すものであると言えよう。

このDヴァージョンのヴィテゲの人物造形を理解する上で『ラヴェンナの戦い』と『アルプハルトの死』は重要である。Dヴァージョンの成立に両テクストが影響を与えた可能性もあろう。第620詩節で描かれる名馬シェミンクがヴィテゲへと与えられるエピソードは，『ラヴェンナの戦い』においてこのシェミンクに乗るヴィテゲが俊足を活かし，復讐心に燃えたディートリヒの追跡から逃れる，というエピソード（RS957, 1ff.）を意識したものであるとも考えられるし，また第624詩節のアルプハルトの殺害についての予告は，当然ながら『アルプハルトの死』を意識して書かれた可能性が高いと言えよう。

またDヴァージョンの作者が，『ニーベルンゲンの歌』にのみ，それも一度しか記されないウィテゲによる（リューディゲールの子息としての）ヌオドゥング殺害のエピソードに言及していることからも，この叙事詩についてかなりの程度の知識を有していたと考えられる。そのことはしばしば指摘されるDヴァージョンと『ニーベルンゲンの歌』との関係の深さを改めて印象づける事実であるとも言えよう。

『ヴォルムスの薔薇園』Ｄヴァージョンは，おそらく本論で挙げた『ディートリヒの流浪』，『ラヴェンナの戦い』，『アルプハルトの死』，そして『ニーベルンゲンの歌』など，歴史叙事詩系のテクストと対比されながら，中世の読書人たちに楽しまれたのであろうし，その際の接点の一つが思わせぶりなヴィテゲの描写であった，と考えられるのである。